

中海干拓地営農事例



損屋地区



安来地区

事例 No. 揖屋 1

経営体状況

- ◆ 地 区 名／揖屋
- ◆ 経営体区分／個人（家族経営）
- ◆ 経営主年齢／40 歳代
- ◆ 営 農 類 型／水稻＋露地野菜
- ◆ 作 物／キャベツ、津田カブ、ブロッコリー、水稻
- ◆ 区 分／認定農業者

・作目別作付け面積 (a)

キャベツ……………	630	ブロッコリー……………	90
津田カブ……………	150	水稻……………	150

・所有施設・機械一覧 施設・機械名・規格 数量

トラクタ 76,54,36,28,23ps ……………	5 台
コンバイン……………	1 台
高床式運搬車……………	4 台
田植機……………	1 台
キャベツ移植機……………	3 台
トラック……………	4 台
農機具庫……………	3 棟
作業庫……………	1 棟

経営の概要

平成 17 年に父から経営移譲を受け、中海干拓農地を中心に機械化体系の確立による生産効率の向上を図りつつ徐々に規模拡大を行っている。

現在では、干拓農地内で 8.7ha の経営規模、主たる労働力は、本人と両親であり、収穫期等の農繁期には期間雇用を雇っている。

経営の成果

干拓地での営農は、収穫期の長い秋冬キャベツを中心とし、1 年を通して作業可能な営農体系を考え取り組んでいる。

キャベツは、干拓営農に適し



出荷調製中のキャベツ

た作物と考えており、全量 JA へ出荷し、「くにびきキャベツ」として関西方面、市内スーパーで販売されている。

キャベツを中心とした営農体系により売り上げは年々上昇傾向である。

今後の取り組み

経営主は、生産の効率化を図るため、今後も研究を重ね、更なる規模拡大を目指している。

また、H29 年度にはレーザーレベラーを導入することとしており、近隣の高齢キャベツ農家のほ場の更新作業や新規就農者等の規模拡大にも協力し、更なる「くにびきキャベツ」の生産拡大に向け基盤強化に努める。

目標は「くにびきキャベツ」をもっと有名にすること。



秋冬キャベツ作付状況



津田カブの作付状況

事例 No. 揖屋 2

経営体状況

- ◆ 地 区 名／揖屋
- ◆ 経営体区分／個人（家族経営）
- ◆ 経営主年齢／40 歳代
- ◆ 営 農 類 型／施設野菜＋露地野菜
- ◆ 作 物／トマト、ハウレンソウ、ニンジン、
その他の野菜

・作目別作付け面積 (a)

ニンジン……………	30	ハウレンソウ……………	10
トマト……………	19	サヤエンドウ……………	2

・所有施設・機械一覧 施設・機械名・規格 数量

トラクタ 30,20,19.5ps ……………	3 台
パイプハウス……………	9 棟
軽トラック……………	1 台
運搬車……………	3 台



経営地を上空から撮影

経営の概要

以前、行っていた水稻をやめ、中海干拓農地での畑作経営のみとしている。

施設は、ハウス9棟によるトマト、ハウレンソウ、サヤエンドウを中心とし、露地はニンジンを中心とした栽培を行っている。

労働力は、経営主のほか家族労働力で対応している。

トマトは半促成＋抑制栽培を組み合わせている。

販売先は全て直売所（市内スーパー、JA 等）である。

経営の成果

トマトは島根県エコロジー農産物の認証を受け付加価値を付けている。

トマトの安定栽培のため土壌や、植物の成分分析を行い施肥設計とアドバイスを受けて実施している。

農産物は、全て市内の直売所（市内スーパー、JA 等）としており、市場価格に左右されない経営としている。

トマトの半促成＋抑制栽培を行うことにより、生産効率を上げている。

数年前より水稻栽培をやめ、干拓地での野菜栽培に専念することで、経営の効率化が図られ全体的に所得が向上している。

今後の取り組み

トマトは半促成と抑制栽培が中心であるが、その他の作型の分散を進め労働時間の平準化と長期出荷を目指す。

また、ハウスの空き期間に新規作目を導入し、より一層の所得向上を図る。



ハウレンソウの作付状況



トマトの作付状況

事例 No. 揖屋 3

経営体状況

◆ 地 区 名／揖屋

◆ 経営体区分／法人

◆ 営 農 類 型／水稻＋露地野菜＋施設野菜

◆ 作 物／キャベツ、大豆、サツマイモ、ジャガイモ、タマネギ、カボチャ、施設野菜

・作目別作付け面積 (a)

キャベツ……………	150	タマネギ……………	15
大豆……………	120	カボチャ……………	10
サツマイモ……………	90	施設野菜……………	20
ジャガイモ……………	15		

・所有施設・機械一覧 施設・機械名・規格 数量

トラクタ 33,31,26,20ps ……………	6 台
パイプハウス……………	7 棟
高床式運搬車……………	1 台
定植機……………	1 台
軽トラック……………	2 台

経営の概要

平成 22 年 9 月 1 日に、農業法人を設立。

自営・自立の農業を目標に地域の環境保全を図るとともに、農業を通じて障がい者雇用の拡大を図ることを目指しており、職員 7 名、利用者 11 名で生産から販売まで行っている。

また、生産物の付加価値を高めるため、「6 次産業化」にも取り組んでいる。

経営の成果

キャベツは、直売所やレストラン、スーパーへ直接販売している。

農産物加工品としては、サツマイモ、ジャガイモ、カボチャをペーストに加工し、洋菓子店等へ直接販売している。

また、味噌や豆腐、梅干しの製造も手掛けている。

今後の取り組み

葉物野菜も順調に販売しており、また、サツマイモ、ジャガイモ等は加工品としての需要もあることから、更なる作付面積の拡大を考えている。

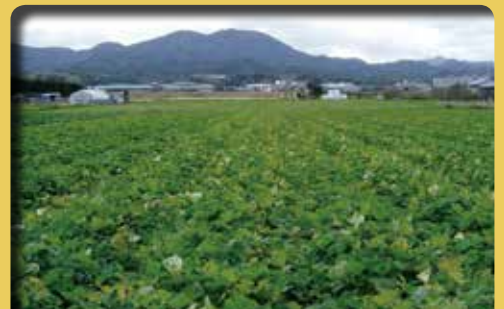
また、農産物加工のノウハウを果物にも応用が出来るものと考えており、その原料となる果樹栽培にも取り組んでいく。



キャベツ作付状況



秋冬キャベツ収穫状況



サツマイモ作付状況

事例 No. 安来 1

経営体状況

- ◆ 地 区 名／安来
- ◆ 経営体区分／法人
- ◆ 作 物／トマト
- ◆ 営 農 類 型／施設野菜
- ◆ 区 分／認定農業者

・作目別作付け面積 (a)

トマト…………… 103

・所有施設・機械一覧 施設・機械名・規格 数量

大型ハウス…………… 5 棟

経営の概要

この法人は県外企業が安来市に支店を置き、平成 21 年に干拓農地を取得。

この農地に大型ハウスを 2 棟建て、抗菌性に優れた植物性培地（スギ・ヒノキ樹皮）によトマト栽培を開始。

更に、平成 22 年には、隣接する農地 2 区画を取得し、大型ハウス 2 棟を建設。

そして、平成 25 年に大型ハウス 1 棟を借り受け、規模拡大を行った。

経営の成果

生産の主体を大玉トマトとし、JA を通じて安来市、松江市、米子市、境港市のスーパーを中心に出荷。

年間出荷量も約 14 t（過去 3 ヶ年平均実績）となり順調に生産を続けている。

安来干拓地は、北西からの潮風を受けることから、潮風のミネラルを含んだトマトとして販売している。

また、平成 28 年には島根県の「美味しまね認証」を受け、安全で美味しいトマト作りを行っている。

今後の取り組み

このトマト栽培システムは確立されていることから、この農場で新規就農者の技術研修を行い、同システムにおける農業者を育成していく。

トマト栽培は天候に左右される部分が多く、こうした天候の変化に対応する技術力を付け、高品質なトマトを安定生産していきたい。



栽培中のトマト



大型ハウスを上空から撮影



出荷調製中のトマト

事例 No. 安来 2

経営体状況

- ◆ 地 区 名／安来
- ◆ 経営体区分／個人（家族経営）
- ◆ 経営主年齢／60 歳代
- ◆ 営 農 類 型／水稻＋露地野菜
- ◆ 作 物／ジャンボニンニク、ツケウリ、黒大豆、水稻
- ◆ 区 分／認定農業者

・作目別作付け面積 (a)

ジャンボニンニク …240	水稻（もち） …… 50
ツケウリ …… 10	黒大豆 …… 10

・所有施設・機械一覧 施設・機械名・規格 数量

トラクタ 53,30,18ps	… 3 台
軽トラック	… 1 台
ハンマーナイフモア	1 台
フレールモア	… 1 台
畝立て機	… 1 台
管理機	… 1 台

経営の概要

経営主は、平成 13 年より自宅近くの水田でジャンボニンニクの栽培を 7a から開始。

当初は、所有地での作付であったため、規模拡大に限界があった。

ジャンボニンニクには需要が見込めると判断し更なる規模拡大のため干拓農地を借り受ける。

現在では、干拓農地内で、2.4ha の経営規模に拡大している。

経営の成果

基幹作物であるジャンボニンニクは年々出荷量を拡大している。

営農にあたっては、栽培作物の独自研究を重ね、より良い作物の生産を目指している。

経営の特徴は、基幹作物であるジャンボニンニクのほとんどを種苗会社へ出荷し、一部を道の駅やインターネットによる直売及びニンニク味噌として加工も行っている。



経営地を上空から撮影



ジャンボニンニク栽培状況



直売用商品

また、ジャンボニンニク栽培で労働力が必要な植付と収穫作業は一斉に行うことで効率を上げている。

近年は、通年の所得確保を目的とし、ツケウリの生産から加工までを一貫して行っている。

今後の取り組み

ジャンボニンニクは、まだまだ需要が見込まれるものと判断され、今後も順次規模拡大を行う。

出荷先も確保、加工体制も整い、順調な経営を行っており、今後は法人化も含めた経営計画の見直しを行うこととしている。

また、規模拡大に伴い専従の人員を確保すべく関係機関と連携していく。

事例 No. 安来 3

経営体状況

- ◆ 地 区 名／安来
- ◆ 経営体区分／法人
- ◆ 営 農 類 型／露地野菜＋施設野菜
- ◆ 作 物／キャベツ、ブロッコリー、スイートコーン、青ネギ、キュウリ、ジャンボピーマン、レタス、イチゴ
- ◆ 区 分／農地所有適格法人以外の法人

・作目別作付け面積 (a)

キャベツ……………	1,760	イチゴ……………	20
ブロッコリー………	420	キュウリ……………	14
スイートコーン…	120	青ネギ……………	7
レタス……………	30	ジャンボピーマン………	7

・所有施設・機械一覧 施設・機械名・規格 数量

トラクタ 57,51,30ps ……………	3 台
トラック……………	1 台
軽トラック……………	2 台
定植機……………	5 台
管理機……………	2 台
冷蔵庫……………	3 基
パイプハウス………	35 棟

経営の概要

大手スーパーが出資して平成 21 年に設立された農業法人は、現在、国内で 21 箇所の直営農場を営んでいる。

島根県では安来干拓地において、平成 24 年から営農しており、経営面積は約 23ha の規模となっている。

この法人の経営理念は、「農業の発展とお客さまの価値を創造する。」として新鮮で安心な野菜を提供するため、GLOBAL G.A.P.（農業生産工程管理）手法を取り入れ、厳しい基準で農産物の生産管理を行っている。



経営地を上空から撮影



キャベツ栽培状況



出荷期を向かえたイチゴ

なお、農産物は、プライベートブランドとし中国地方の系列スーパー等に出荷している。

経営の成果

干拓営農開始時に確保した農地面積に比して、現在の栽培面積は 2 倍以上となり、生産量も増加している。

なお、経営の主体となっているキャベツの反収も年々増加傾向となっている。

近年、栽培を開始したイチゴは順調に生産、出荷し、消費者からも好評を得ている。

生産面においても、干拓地内にある県農業普及部の指導、協力を得、順調な生産を行っている。

今後の取り組み

キャベツの周年出荷が可能な生産体系の確立を目指し、引き続き生産性の向上を検討していく。

また、需要があるタマネギの機械化体系の確立を図るため、試験栽培を実施し、栽培面積の拡大を目指す。

中海干拓地の概要（揖屋・安来地区）

中海干拓位置図



全形写真 農地面積（合計 331.1ha）



揖屋地区

農地面積 202.8ha



安来地区

農地面積 128.3ha

干拓地での主な作物

揖屋地区

キャベツ	スイートコーン
ブロッコリー	津田カブ
ニンジン	サツマイモ
ぶどう	トマト

安来地区

ネギ	キャベツ
スイートコーン	ぶどう
イチゴ	ブルーベリー
ニンニク	ブロッコリー
キュウリ	トマト

公益財団法人 **しまね農業振興公社**

◆お問い合わせ◆

〒690-0876 島根県松江市黒田町 432 番地 1
 TEL 代 表 0852-20-2870
 TEL 干拓農地課 0852-22-5115（県庁農地整備課）
 HP アドレス <http://www.agri-shimane.or.jp/>
 E メールアドレス kousha@agri-shimane.or.jp